

「だって、はずかしいんだもん」

校長 柏原 奈保

「校長先生、見て！」

朝、ある子が小さなカマキリを見せに来てくれました。そのカマキリは、3cmほど、色もまだ薄い緑色、細く、弱々しい感じでした。「これ、どうしたの？」と聞くと、道の途中で見つけた」と言います。「まだ、赤ちゃんのカマキリだね。」というので、その子は、「じゃあ、逃がしてあげなくちゃ。ここ（正門のそば）じゃ、だめだよね。」というので、「奥の花壇の方に逃がしてあげたら？」と話すと、「それがいい」といって、その小さなカマキリを大事そうに持って、行ってしまいました。小さな命を大切にしようとする温かな気持ちが伝わってきました。

ダンゴムシを持って見せに来る子もいます。「それ、メス？オス？」と聞くと、「これは、メス！背中に点々があるよ。」とか、「まっ黒だからオス！」などと、大概の子どもが答えることができます。そして、大事そうに持っていきます。

子どもたちのこんな何気ない、でも、大切な心を、丁寧に育てていきたいなと思います。

さて、先日のお便りでもお知らせした通り、学校では熱中症予防のために、屋外での活動や登校時には、マスクを外すよう指導しています。しかし、マスクを外すことができない子どもが多くいます。



暑くて、顔を真っ赤にして、汗を流しながらも、マスクをして登校してくるのです。

「マスク、取っていいよ。」と声をかけると

「あっ、そうだった。」という顔をしてマスクを外します。暑くても「マスクを外す」ということには結びつかないようなのです。



校庭で体育をしている高学年に「マスク、外そうね。熱中症になっちゃうよ。」と言うと、「だったら、先生もはずして！」という声が返ってきました。別の子は、「だって、恥ずかしいもん。」と言います。「みんながとるならいいよ。」と言う子もいました。

放課後、遊んでいるときには、マスクはしていない子どもが多いと聞きます。仲良しの子の前なら、外せるということでしょうか。

コロナ禍で2年以上もマスクをする生活を続けている子どもたち。マスクで顔の半分が覆われていることが当たり前になっているため、それをとること、つまり顔をすべて見せることに抵抗があるようです。マスクを外すのは人前で下着を脱ぐのと同じような恥ずかしさを感じるという意味から、マスクのことを「顔パンツ」と呼ぶ人もいます。まさに、そのような気持ちなのかもしれません。マスクをしていない生活が何十年の私ですら、2年間マスク生活をつづけたことで、マスクを外して外に出ると何かを忘れたようなスースーする感じがします。子どもたちにとっては、なおさらのことなのかもしれません。「外したい」「外したくない」ではなく、「外せなくなっている」のです。

このところ、気温が高く、蒸し暑い日が続く、熱中症の危険が増しています。学校では、マスクを外せない子どもたちの心に寄り添いつつ、命にかかわる危険がある熱中症を予防するため、子どもの命を守る指導を続けていきます。子どもたちにマスクを外させる指導は簡単ではありませんが、熱中症の危険を伝え、安全な毎日が過ごせるようにします。ご家庭でも、子どもたちに屋外や運動時などにマスクをとることを声掛けしていただきたいと思います。